

（ページが重さずるので2ページにわけました。これは2ページ目です。）

＜探録＞パフォーマンシアーティストへのインタビュー vol.3 <2ページ目＞

Artist：池田 一氏 Ikeda Ichi

インタビュー日 / 2004年1月30日（金）19：30より

Interviewer：山岡拓紀子

観客からの発言：嵐原康則

●漂う地球 Floating Earth

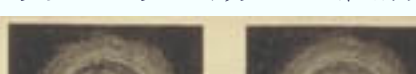
池田：次は、第21回サンパウロビエンナーレです。特別招待ということだったので、25m程の高さの吹き抜けの、一番いいスペースを使わせてくれました。ニーマイヤーという有名な建築家の作った吹き抜け空間だそうですが、各階の回廊のつまり具合が全部違うので、上から見下ろすと全部違った眺めになるんです。これは、1991年です。

山岡：パフォーマンスアートの作家として呼ばれていましたか。

池田：うーん、多分、3ヶ月間の展覧会の、オープニングパフォーマンスを任せましたから。こういう巨大な作品プランを提出した時に、国際展ではどのくらい向こうが手伝ってくれるかの交渉がむづかしいんです。この時は、水を溜めるための外枠を創るのが大仕事なので、私が到着するまでに着工してもいいみたい。木材を使うという、どんな木の種類かという話になるので、どこにでもあるコンクリートブロックでいいです。でも、着工したと言っ連絡がこない。それで、ブラジルに飛び立つ時は、とにかく大の字に寝てこうと覚悟しました。わたしはアーティストなんだ、作品を設置するのは大の字に寝るのは等価値なんだ、どこが悪いのかと。そうでも思わないとね、成立しないですよ。たぶん、私はパフォーマンスをやっているからだと思いますが、土壇場のどてで譲れないかと、直感的に知っているんだと思います。これが、完成したところです（写真左）。まわりは、ブラジルの赤土です。あの範囲に入ってきた観客がそのまま、他に動くと、赤い足跡が床につくんですよ。強烈な赤ですからね、池田一の作品が侵犯してくるって、クレームがつかました。水の青いのは着色です。

嵐原：顔料は何ですか。

池田：料理用の食紅です。他のアーティストが、青をあげるよって、染料を持って来てくれたんです。でも、どう見ても有害そうなので、それじゃなんのための作品かってことになっちゃうので、断りました。最低きれいな水ということで、有害ではない、食紅とせっけんの類を使いました。まん中にEARTHと書いたキャンパス地の、巨大な本があります。毎日頁をめくっていくと、キャンパスが水を吸収して、青い色がEARTHの周りにしみこんでいく。展覧会が終わって引き上げると、毎日の水の動きの痕跡を記録した本が出来上がりです。見聞を一日分として、展覧会が81日間だったので、162頁の本になるわけです。



Floating Earth

次の図（図左）は、2つの種類の波紋がいつも発生しているということの説明です。それぞれの水槽のまん中から広がるのと、センターの本のところで広がるのと、タイマーで切り替わります。呼吸している地球ということで、常に水が湧いているわけで、エアポンプを200台くらい使っています。そして、オープニング・パフォーマンス（写真下）。テレビの生中継放送も入っていて、とにかく大盛況、3000人くらい観客がいたかなあ、3階まで、人がびっしりです。「水鏡」のパフォーマンスを行うと、吹き抜けの天井まで波紋は上がりまして。ゼネラル・キュレーターのジョン・カンディド・カルボン氏は、後で「水に反射する光が空間に生み出した虚像としての彫刻は、常に存在し、また常に変わり、まさに私が芸術にたとえる反動的な大きな鳥そのものである」と書きました。私の前にこの場所を使ったのは、ヨーゼフ・ボイスだそうです。ボイスの、ブロンズ、鉄、アルミで造った桶妻よりも、もっと繊細で、それほど物理的でない私の作品の方が好きだ、とカンディド氏は言っていました。そして、その真ん中に浮んでいるEARTHの本の真真（写真右下）をめくっていく。本から波紋が広がっていく中での、パフォーマンスです。それから、これは是非、やりたかったことで、観客の前で、いつものゴーグルをして、波紋と共に呼吸している感じで、大の字に寝る。水が私を生かし、私が水を生かすというコンセプトでしたから、水をはね上げたり、かき回したり…。そうこうして、パフォーマンスを終えて、水の外に出たら、ものすごい拍手が沸き起こったんです。つい嬉しくなって、思わず声を、即興で、出したら、その声に合わせて、観客から合唱がおきたんです。

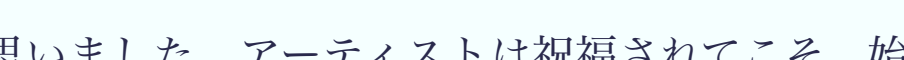


Earth Up

そのものすごい大合唱で、私は祝福されていると思いました。アーティストは祝福されてこそ、始めて自分以上の力を出せるんだと。祝福されると、自分でも気がつかない大きなものが、自分で自分を驚かさそうんなものが出てくる。ですから、半身に纏ってしーっとして見てないで、是非アーティストを祝福して下さい。ここサンパウロでは、良い体験をさせてもらいました。



Earth Up Mark



●Earth-Up-Mark



池田：次は、少し時代が戻ります。松枝岐で、1985年の時のものです（写真左）。なぜ、こんな表現をしたかと言うと、右大腿骨の骨折の後でしてね。完治したわけではないし、再度転倒したら大変なので、恐る恐るで、何が出来るかわからない。そんな時、月に2、3回やっていた、多摩川でのワークショップで、ちょっと身体が寝そべるぐらいの細い流れに横たわって、空を見ていたら、・・・大きなものと対話していると感じたんです。あ、これが、これだけける。何もしていかなくとも、私が宇宙みたいなものと交信しあっている身体を感じている。何かと闘っているでもないし、喘いでもないし、何もしていない。でも確実に自分が立ち上っているのを感じている。それだけで良いのだ、と。それで十字を掘りまして、青く色を染めて、顔だけ露出して、身体を沈めました。この写真のものは、黙々と観客抜きでやったものです。でも、観客の前でのパフォーマンスとなると、対話のしかたが当然違ってきますね（註：写真の前日）。どうしたかという、真っ白い服を着て、十字の水に入る。そして、外に出ると、服が青く染まって、青色人間のように変身。また白衣に着替えて、十字の水に入っていくという動作を繰り返しました。途中から、ものすごい雨が降ってきたので、水の中で口開けると、雨がざあーと入ってくるんだ。そして、青の集落をイメージして、青いテントを幾つか張ってあったので、観客はテントで雨を避けながら、見ていられるわけです。雨の中、こちらは、結構苦しい。パフォーマンスには、本来、終りがないものだし、見る権利があれば、見ることを拒否する権利もあると思っていますので、ハイこれで終わりますという挨拶は性に合わない。終わったまま終わればいい、さっとユックを背負って、豪雨の中、その場を離れました。観客を背のテントに残して、近くの共同温泉へ。そして、私が温泉に入っていたら、嘘のように真っ青に晴れ上がりましたね。私は雨を呼ぶ男なのか、私が行ったときに雨が降るの

で、居なくなったから晴れたのでしょうか、多分。

山岡：その青く染まった服を、干していったんですか？

池田：そう、石の上とかかね。パフォーマンスの痕跡は、残っていく。私がいなくても、それらが何かを語りかけてます。

山岡：見ている人が、サンパウロの時のように声を上げますか？

池田：日本人はしません。なぜか（笑）。この写真は強い説得力があるのか、1995年の国連50周年記念の立体アートカレンダーに選ばれたものでして・・・。世界中から選ばれた12人のアーティスト、そのうちのひとりが私で、なぜか12月のトリをとることになりました。ある人に言わせると、地球とともに呼吸している。人と自然とが調和しながら、生きてる。十字架の願いととらえる人もいます。

山岡：私はこの十字架が気になってまして、ずっと聞いてみたかったんですが、池田さんにはキリストのイメージはあったんですか？

池田：キリストはないですね。私には居心地の良い場所ということなんです。

山岡：でも、大の字という、京都の大文字焼きでも、形がこうではないですよ。1本少ないから、掘りやすいっていうのもあるでしょうけど。

池田：私には、ぼってん、地球のへそなんです。へそっていうのは、赤ちゃんのへそと同じで、生存の原点みたいなものです。私は、殉教者のようにここで死にたくない。ここから生まれ出たいんです。でも、見る人の問題ですからね・・・。

山岡：私はこれだけでは、あまり気付かなかっただんですが、池田さんは別の作品で、「最初の晩餐」という作品で、12人の参加者（使徒ならぬ？）が、手の写真の大きな布か紙を持って、光が通るようにしていて、そこに池田さんが現れるというものだったようですから、池田さんは意識してらっしゃるのかなと考えていたんです。

池田：いやー意識はしていないです。アーティストは、常ににかの始まりに立ち会っていたい。最後の晩餐があるなら、最初の晩餐もあってもいいと思っだし、最初の晩餐は水で始まり、そして水で終わるものどだと思っただんです。それから13人になかったのは、別に裏切り者はいないから12人にしていうことだけなんです。アメリカのアーティストだが、私の作品をritualと言ったりしましたが、何かに依存してやっているのではなくて、自分から全て起順していたものなので、ritualという言葉はとにかくいやでした。

嵐原：私もやはり、どうしても子供が生まれた時の聖体拝受とか連想しますね。そして死に水ををとるということもありますから、それもやはり水に始まって水に終わるということに繋がりが、イメージしてしまいます。

池田：それもわかりますね。私自身の、私も気づかないところで、何かを強く発しているのかもしれない。私を離れて、ここから何かが歩き始まっているというようなどがある気もします。

●Earth Drawing

池田：次は、「Earth Drawing」。これも非常に気に入っているパフォーマンスです。場所は、ソウル郊外の漢江（はんがん）の河原です。土手に1m立方の穴を掘って、日本の遺物や韓国のキムチと同じ要領で、キャンパスを漬け込むんです。穴の底にキャンパスをおいて、土と草をかぶせる。それからまたキャンパスを置いて、土草・キャンパス・土草・キャンパスといった具合に、50枚くらい重ねると、ちょうど1メートルくらいになります。展覧会の45日ほど前にも河原に行きまして、これらの作業をして、外から見えないくらいに重えました。それから45日後の、展覧会直前の日。これを土中から引き上げるのですが、水を大量に吸って、2トンくらいの重さに達しているから、この作業がすごい。手作業は無理なことはわかってますから、穴の底に鉄板を敷いて、引揚げ用のワイヤー数本を最初から入れてあります。それで、クレーンで、ゆくりゆくり引き上げると、立方体が、土の中からふわーと飛び出してくる。かつて見たことのない超現実的な印象でしたな。その2つの立方体を、ソウルの東崇アートのセンターのギャラリーに運び込みました。そして、ギャラリーで、「Earth Drawing」を読むパフォーマンスです（写真右）。共有の文字やコミュニケーション手段を持たない人が、初めて、何かに感動した瞬間。その激情をどう他人に伝えるか。そんな思いで、1枚1枚、草と土のへばりついているキャンパスをはがしていく。そこに現れた模様の目をしした瞬間、何か文字のようなモノが、何か聖典のような番号が・・・。それを即座に読み取り、伝える。おお～ととか、うい～と～ととかいふ表わしようのない、リーディング。そして読み終わったら、キャンパスを壁に貼る。この時、日韓の作家8人のためにということで、8枚分をキューブから剥ぎ取り、展示しました。このパフォーマンスは、韓国の人たちの度胸を抜いたようで、これまでのパフォーマンスの常識がすべて覆った、とまで言われました。評論家の金永材氏は、その理由を「多分、その声が地球のコアからの声といったものを連想させたかどうか」と。この「Earth Drawing」からの影響力は、かなり大きかったんじゃないかな。2度やれて言われても、どこまで深く突き進めるか。1回性のパフォーマンスですから。

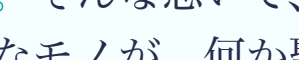
山岡：2度やると、自分自身を驚かせられなくなるのでしょうか。

池田：そうそう、何かいったんわかってしまったに対しては、身体が横着になって、ついて来ないんです。何か新しい閃きがあれば、自然とがんばれるんですけど。芸ではないですから。

●水マングラ Water Mandala



Water Mandala in Tenkwa



1993 Tachi Ikeda

左の図は、「水マングラWater Mandala」の計画図面です。上の方に書いてある象形文字は、地球を巡る水の流れを、雲、雨、川など、水の12の循環を表わしています。下はからだの中の循環。そして、間には、何も書いてない50枚のキャンパスが挟まれています。「Earth Drawing」のやり方だと、間のキャンパスに地球の出来事を模倣化して、12冊の本を作ろうというプロジェクトです。一番上が「海」で、下が「手」の場合、「海-手」と言うことになるわけです。「川-鼻」とか、「雲-目」とか・・・。

これでわかるように、ひとつひとつの穴のまわりは、銅板でできていて、上に書かかれているのが、いまお話しした象形文字です。その後、穴の中のキャンパスの上に石を載せて、地中に埋めます。一番大事なことは、満月の日に始めて満月の日に終る。満月の夜は一番水面が上がるからです。埋め終わった後、私は天川を離れ自宅に戻って、4週間後に行ってみると、案の定、宮司さんはまわりて結界を張ってたんです。（笑）中に入れないように。どうしても、聖なる場所にしたりがるんですよ。え。

パフォーマンスの日は、石を押しつけ、キャンパスを1枚ずつ地中から引き出していきます。でも、一つの穴から50枚、それが12個ある訳ですから、大変な量です。途中から、観客参加のパフォーマンスということと、見ている人たちと一緒に、12の「水の本」を引き上げました。このプロジェクトのがんばりどころは、宗教とアートを、どうしてもいっしょにしたくなかったということです。宮司さんからは何度も誘われましたが、頑として断り続けたら、最後には「池田さんの作品の上で水が渦巻いている夢をみました。すべて池田さんの思うままです」という宮司さんの感想が返ってきました。

●大地の本 Book of Earth

池田：いろんなプロジェクトがある中で、私は松葉杖を1年半くらいついていたか。先程のソウルの時もサンパウロの時も、実は、私は松葉杖をつけて行きました。当然、受入側の人は、びっくりした様子が、大丈夫かなあ、といった感じで・・・。そうそう、その頃、私にとって、非常に大事な体験がありました。やはり松葉杖をつけての旅で、カナダのオタワとモントリオールでパフォーマンスをやった後、ナイアガラの滝に行きました。猛烈な勢いで水が落下する、滝つぼから勢いよく水煙りが立ち上る、その水蒸気が雲につながり、雲から雨が降ってくる。その自然の循環のサイクルの中に、雨に打たれた私がい。自分自身が確実に宇宙の自然の仕組みの中にある、そういう構図が見えたんです。口から出ていたのは、プランタリーネットワーク Planetary Network とか言う言葉。私がその宇宙的なネットワークに参加することによって、始めて大きな構図が見えてくるのではないかと。換言すれば、私は自然のサイクルをもとに言葉であって、身体表現として多くのことをやらなくてもいいのではないかと。自然環境とかいうと、自分を取り巻く外の世界みたいに言うけれど、自然というのは外に視点があるんじゃない。自分が介在して始めて自然が出現する。このナイアガラの滝での体験から、インスタレーションとパフォーマンスを組み合わせたプロジェクトが主流になりました。松葉杖の方は、順天堂病院で診察してもらっていたら教授の方が定年で「私の方が先に出ていくことになりました」とって辞められたので、私がとり残されてしまつて・・・、それで思いきって、松葉杖を離しました。

この『大地の本Book of Earth』と言うプロジェクトは、プランタリーネットワークの面白い例です。これは、千葉ニュータウンのために、急速に土地開発が進められている場所です。そこ、荒涼とした土地の一角に、盛り土をして出来た高さ10m程の高台があります。ここへ、千葉2、10mの高台から見下ります。『大地の本』を設置しました。本といっても、大きさはだいたい10mx5mくらいかな。このインスタレーションの中でやっていたパフォーマンスは、2つのページの、それぞれの真ん中で、地球の芯に向かって、穴を掘ることです。穴は直ぐ崩れ落ちてしまうので、出掛けて行ったら穴を掘り、行ったら掘り止めました。穴の周りは季節によって、結構変化して、草がぼうぼうと生い茂ったり・・・。本のタイトルは、「大地の歳事記」がピッタリですね。基本的なアクションはただ穴を掘るだけなんです、それで自然の大きなサイクルが出現してくるわけです。

時に、土壌改良剤を加えてみました（写真左、本のページが白くなっている）。「大地の本」のまわりは、どんどん開発工事が進み、駅建物が出来ると、大きく変貌しています。子供達はまだまだわりに自然があるので、なぜかここに遊びに来るのですね。穴を掘っていると、よく来るものだから、土壌改良剤を使って

（白い改良剤が模様状になっている）と、それで、この模様は、ひとつは大地が笑ってるよ、もうひとつは大地が怒っているよって、ことで描きました。子供達はまわりの自然よりも、こっちの方がもっと大きな力かがクローズアップされていると感ずるのですよか。

●パフォーマンスのサイクル



Earth Up



Earth Up

池田：アクションといえば、私はほとんどが現地制作なので、リサーチワークというか現地調査も非常に重要です。これは、台湾の、台北を流れる淡水河をテーマにした展覧会のもので、1997年のことです。淡水河を調査したら、かつて川沿いに7つの染えた港町があったことがわかりました。国立藝術学院の蘇守政さんに協力してもらって、7つの港町を巡って、それぞれから川の水を採りました（写真左）。町には必ず寺院があって、そこに祀ってある神様はそれぞれに違うから、この町は中国のどの州から渡って来た人たちによって造られたか、がすぐわかるというのです。蘇さんの知識のおかげで、ずいぶん勉強になりました。

そして、7つの水は、台北県立文化センターに運びました。センターの入口の太い柱を覆っているのは、私の作品でして、アジアの川の名前を網羅して、それらを順番に書いてあります。アルファベットがいいと言ったのですが、台湾の人たちが読めない困るといので、スタッフが、全部漢字に変えて手描きで作ってくれました。300くらい川の名前で、大仕事です。その柱に囲まれて、設置しているのが「循環の舟Water Circulating」と名付いた、水を運ぶ舟。その中で、7ヶ所の川から汲んできた水をかきまぜて、1の水をやり、それを繰り返して、7つの箱に詰めていく。7つの箱は7つの海に送る積み荷という意味です。「淡水河から、7つの海へ」という、パフォーマンスです。

山岡：水の箱の中に、

池田：水の箱の中に、水洩れないように、ビニールが入っています。この「循環の舟Water Circulating」は、パフォーマンスの翌日、淡水河のほとりにあるBamboo Curtain Studioに移しました。そしてこれは、展覧会の最終日。ワークショップといった感じで、水箱の中に貯まった水を抱って、別のガラス箱に入れていきます。その7つのガラス箱を持って、池に行き、そして、チャーターした漁船に積み込んで、河口まで出て、循環の舟の水を海に流しました。ここでしてほしい指示は、箱はもうここにいらないということです。僕のウォーターマンは私が火付け役になって、大きなサイクルのアーチ。後は託しちゃう。根幹にはない点は送りませんが、後は彼等のふくらんだイメージであって、やってもらうんです。同時に展開した鹿児島に加世田でも、同じようなことが起きました。私がいなくとも、大きな循環のサイクルが共有できれば、あとは波及して、何かがおこる。何かが生まれる。このように展開は、私自身がパフォーマンスの原点というかもともとコンセプトのいうところに、戻っていったのかもしれない。身体が、自然に、地球を巡る大きなサイクルに、自分が行ったのかもかもしれません。

山岡：池田さんが、水に惹かれているとおっしゃっている内容が、そのままだ、人にあてはまるのかと疑問に思いました。本来制御できないものであり、決めてあたるものではないで、対話しながら動いているといったような。それは今池田さんがたくさんプロジェクトをやっている時に、まずプレゼンテーションをしてしまった所から始めて行くプロセスは、人を動かすことが基本になっているものではないでしょうか。

池田：ええ、そうですね。私は、他人を見る場合、目の前に見えているものではないと思っています。その時々で見れとしてあるだけで、本当はもっと膨大な存在ではないかと。基本的には人間観は、人間グラデューションと呼んでいるように、人にはほんのある部分だけがあらわになっているだけで、実は膨大に広がっている。でも、人生1回キリですから、どういう形で出てくるかわかりませんが、そういう風に、実際にほんのほんの部分だけのわけではない、自分自身、出来るだけ、あらわでいたい。と。ほころびがあって、そこから何かがかぼれ落ちる。それを大事にしたい、と常々思っています。

とうことで、私は、あまり今は観客相手のパフォーマンスはやっていません。でも、アクションには終わりはなく、今はいろんな土地で、水の入った容器を持ち歩いています。「未来の水」が入った容器で、それを持ち歩いたのは、東京、相模湖、鹿児島、沖縄、鹿児島、バンコク・・・。多くは、ビデオ作品としてまとめられます。アクションとしては、戻り戻って、プライマリーアクションかも知れません。

●アジア・エッジ Asia Edge

山岡：最後にもうひとつお尋ねしたいんですが、以前『アジア・エッジ』という展覧会を企画されていましたが、アジアに選ばられたのは、どういうことからですか？国際交流基金の勧めもあったんですか？

池田：『アジア・エッジ Asia Edge』はですね。世界とインターナショナルとかいう言葉を簡単に使うのは、もともと好きではない。自分のからだの延長でとどく範囲は、せいぜいアジアなんです。アジアと言っても、国別対抗みたいな、インドネシア、タイ、フィリピンを代表とかといった感じで、各国のアーティストたちが集まるのは、おかしいと思っています。アジアの中で、ユニークなアーティスト、アジアの持っている固有性を伝えながら、国際性のあるアーティスト。そこにアジアの可能性を見い出したと思って、国際交流基金からの助成事業として、タイ、マレーシア、シンガポール、香港をまわりました。それは非常に難しい作業でして、結局3人くらいしか、これだといえるアーティストはなかった。プロデュースというよりも、自分自身のアジア・エッジの発見って面が強かったからかもして、結局、次に考えたのが、それなら、アジアアメリカンはどうだろうか、と。意外と、アジアの固有性を持たしながら、世界的な展開があるのではないかと期待して、ニューヨークに飛びました。実際、かなりたくさん組織があって、ゴジャとかいうアーティスト・グループがあったら、アジアアメリカン・アートセンターやフィルム上演組織があったり・・・。ほとんど隈なく回ってわかったのは、ニューヨークの中の模範分け文化だなあという実感です。例えば、中国の作家ですと、ニューヨークでもいったん色分けしてはいる。西欧の人から見たら、見やうのないものもたぶん。石を投げたらアーティストがぶち当たるというわけじゃない、ニューヨークで、生き抜く知恵だとわかりますが、同じアジアの私から見たら、本当に珍妙なものですね。これが全てだとも言いませんが、出会いにはがつつきまして・・・。私の今までの体験から言って、「個有的であれはるほど普遍的な」、Inherent to Asia/Global from Asia・・・そんなアジア・エッジの持っている固有性、普遍性は私はい出会いたいと、いつも思っています。

●オルタナティブな活動

池田：それから、活動助金のことで、自分で出来ることと、かなり分厚い報告書を助成団体などに提出することでしようか。例えば、国際交流基金の助成事業として海外で活動した場合、1頁の報告書を書くのも大変だと言う人も多いんですが、私の場合にも冊子が出て来る程の報告書を出すようにしています。1丁で分厚い報告書を出す、と担当課長などが感心して、必ずその意欲を覚えてくれました。さまざまジャンルの人も、そこまで臆ん張るかどうか・・・。私の場合、報告書は、なぜパフォーマンスが作品の一種だと思っているか。終わる時が、始まり。事の終わりが、事の始まりです。でも誰も覚えてくれない。誰もカバーしてくれない。自分で自分の出した足を支えるはかない、つまり前へ自分が進むための足場作り。新しい分野のアートを、独自に開拓しようという意欲があるならば、報告書が普通のとっくにないから、それが足場にならない。3・・・、こういうアクションを積み重ねることを大事にしたいと思っと思います。それから、もうひとつ重要なこと。三菱銀行国際財団から、連続3回にわたって、助成を受けた時のことです。もともと芸術関係の助成はしていない財団なのですが、一緒に活動していた池田美穂子（註：池田一氏の妻）の働き、多分ここは必要なんじゃないかと。それで、日韓の新しい国際交流という観で申請しました。重要なことは、国際交流を提案したのではなく、新しいコンセプトが必要なのであって、使い古された相互理解とか文化紹介的なものでもなく、友好、協調的なものでもなく、で、私が提案したのは、「共創」という概念で、それを徹底的に主張しようと思っただんです。この理解が筋理事も熱心な一方で、二度、電話をもりました。それも、毎回、1時間くらい、電話で話しました。常務理事が言うには、日韓の、あるいは日中の学生交流などで、はじめはもう、学生同志ぶつかりや、喧嘩になる、と。1週間くらい、だまに生活してると、最後は肩抱き合つて、これが友好ですって。で、私は言ったんです、キッパリと、それは違いない。そうである、と相づちを交わらして、しょべだとしてうね。で、私は思いますと、これが最後、それは学生さんのことでしょうか？よかったってはいけません。私たちのやるべきことは、それを通して、何に次に向かえるか、何を次に生み出し得るか、そのために何をお互いに担えるか、それを問わなければならない、と。助成というこれらの国際交流は、アートの世界から始まる、としきりに言っていたんですが、3回にわたって、そこに動きがありました。そう、電話を打って、3回にわたっての助成ですから、本当に助かりました。

こういう一連の活動の前提となっているのは、必ず、オルタナティブな経済があるのだと信じているからです。ぎくしゃくしながらも、オルタナティブを信じてやってきました。今後はどうかはわからないけど。

